

首相答弁における一人称表現と文末表現の定量分析

杉田智拓¹ 掛谷英紀²¹筑波大学大学院 システム情報工学研究群²筑波大学システム情報系¹s2520777@u.tsukuba.ac.jp ²kake@iit.tsukuba.ac.jp

概要

本研究では、国会会議録から抽出した歴代首相の答弁における言語表現の特徴を定量的に分析した。宇野宗佑 (1989 年) から石破茂 (2025 年) まで首相の答弁約 56 万文を収集し、形態素解析を用いて一人称表現および文末表現を抽出した。一人称については単数形と複数形を判別し、文末については断定表現と曖昧表現をリストに基づき分類した。その結果、一人称に複数形を使用する割合が多い首相には保守系が多く、逆に単数形の使用頻度が極端に高い首相は革新系が多いことが分かった。一方、断定表現と曖昧表現の使い分けについては、政治思想を反映するような差は見られなかった。

1 研究背景と目的

政治的言説に含まれる言語使用の特徴の違いを定量的に把握しようとする試みは、欧米では数多くある[1]。たとえば、上院議員[2]や最高裁判事[3]のイデオロギー傾向の分析、法案成立の可否を予測する研究[4]などが行われている。一方、日本ではその種の研究は極めて少ない。

日本の政治的言説を対象とした研究としては、木村らによる新聞社説を用いた右翼度・左翼度の自動判定[5]、大南らによる国会議事録に基づく短命議員・短命大臣の特徴分析[6]などが挙げられる。木村らの研究は、単語・熟語・文末表現という三つの素性を手がかりに、新聞社説をどの社のものに分類できるかを調べた。その結果、読売新聞、毎日新聞の2紙で、92%の正解率を出した。学習した特徴として、名詞では、前者で硬い表現、後者で柔らかい表現が多い一方、末尾表現では、前者で曖昧表現が多く、後者で、断定表現が多いことが分かっている。

また、大南らの研究では、国会議事録を対象に分析を行い、短命議員の発言において尊敬語・謙譲語

などが相対的に少ないという特徴を明らかにしている。その他、国会議事録を対象とした分析には、畑中らによる研究[7]、尾崎らによる研究[8,9]がある。また、異なる政治的言語資源の分析としては、橋本らによるウェブ上の政治家評価サイト「みんなの政治」を対象にした研究、橋本、東らによる国会議員のツイッターを対象にした研究[10-12]などがある。これらは一般の議員あるいは大臣に注目したものであるが、歴代の首相の発言を定量化する研究は、トピックに注目したものはあるものの[13]、発言スタイルに注目したものは知られていない。

そこで本研究では、首相答弁における発言スタイルを対象に解析を行う。首相答弁の性質上、単語や熟語の選択は時事的要因に強く依存する可能性があるため、一人称表現および文末表現に焦点を絞って分析を行う。一人称の単数形と複数形の使い分けを手がかりとして、首相が個人として責任や意志を前面に出すのか、あるいは集団や合意を強調するのかという特徴を見出すことが期待される。

2 研究方法

本研究では、国立国会図書館「国会会議録検索システム」[14,15]を用いて、宇野宗佑 (1989 年) から石破茂 (2025 年) に至る歴代首相の国会答弁を収集した。分析対象は約 56 万文に及ぶ首相発言である。

一人称表現の分析にあたっては、形態素解析器 MeCab[16]を用いてテキストを分割し、「私」「僕」「我」「我々」「自分」「わし」等の基本形を抽出した。さらに、「たち」「ら」などの接尾的表現の有無に基づきリストを作成し、単数形と複数形を自動的に判別した。抽出された一人称表現については、首相ごとに出現頻度を集計し、単数・複数の比率を算出した。

文末表現の分析においては、断定性および曖昧性を示す表現を収集し、独自のリストを作成した。断

定的表現には「である」「必ず」「明らかである」などを、曖昧的表現には「と思う」「かもしれない」「と考えております」などを含めた。形態素解析により文末表現を抽出し、このリストに基づいて分類を行った。各首相について断定表現と曖昧表現の出現割合を算出し、さらに代表的な頻出表現を抽出することで、答弁スタイルの特徴を計量的に把握した。

3 分析結果

本研究では、宇野宗佑(1989年)から石破茂(2025年)に至る歴代首相の国会答弁を対象に、一人称の単数形・複数形の割合と断定的表現と曖昧的表現の使用傾向を比較した。

3.1 一人称の単数形・複数形

一人称表現について、単数形と複数形の比率を歴代の首相ごとに集計した結果を図1に示す。この図のとおり、一般的傾向としては単数形の使用比率が高いことが分かる。

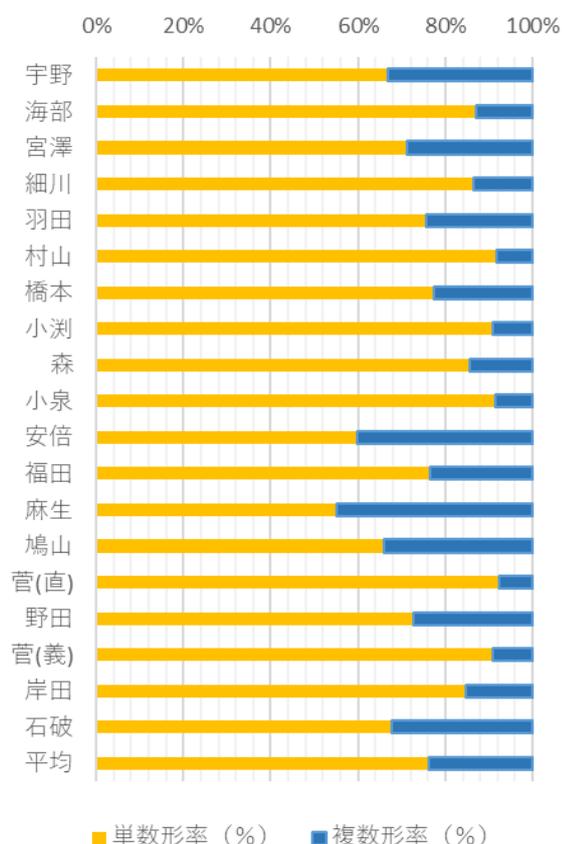


図1 一人称の単数形・複数形の割合

特に村山富市、小渕恵三、小泉純一郎、菅直人、菅義偉は単数形の比率が他の首相よりも高く、麻生

太郎、安倍晋三は複数形の使用頻度が高いことが分かった。

3.2 断定的表現と曖昧的表現

文末表現について、断定的、曖昧、その他に分けて、その比率を歴代の首相ごとに集計した結果を図2に示す。総文数約56万のうち、断定文は約10万(18.1%)、曖昧文は約9.6万(17.1%)、その他が約36万(64.7%)であった。

断定と曖昧はほぼ拮抗しており、それ以外の文章の比率が高くなっている。断定文の割合が高かったのは細川護熙や安倍晋三であり、曖昧文の割合が高かったのは小泉純一郎や麻生太郎であった。



図2 文末の断定表現と曖昧表現の割合

断定表現の中核を成したのは「でございます」と「であります」であり、両者を合わせると断定表現の大部分を占めていた。他に「明らかに」「必ず」といった強意表現も確認されたが、出現頻度はごく少数にとどまった。

一方、曖昧表現に関しては、「と思います」「と考えております」「と思っております」が大半を占めていた。これらは柔らかな断定回避の形式として、

ほぼすべての首相に共通して多用されていた。

その他に分類される文末表現は、事実説明や手続き的説明を目的とした中立的表現が大半を占めていた。

4 考察

一人称に単数形の使用が多かった村山富市、菅直人は革新系の首相の代表的な人物である。ほかに単数形の使用が多かった首相のうち小泉純一郎、菅義偉は自由民主党の首相ではあるものの、既得権益の問題や環境問題などで革新系に近い政策を打ち出していたことで知られている。一人称に単数形の使用頻度が多いことは、首相個人としての意志や責任を前面に押し出すスタイルであるという点で、革新的政策との親和性が高いと考えられる。

一方、麻生太郎や安倍晋三などの保守系の首相では、「我々」「私たち」といった複数形の一人称を使うことは、政府の一体感あるいは国民との連帯性を強調するという点で、保守思想との親和性の高さをうかがわせる。以上の違いは、首相が「個人として語る」のか「集団を代表して語る」のかという談話戦略の選択に対応していると考えられる。

文末表現については、先行研究[5]において、保守的な新聞では曖昧な文末表現が多く、革新的な新聞では断定的な表現が多いという報告がなされている。ところが、首相の答弁においてはそれと同様な傾向は見られなかった。安倍晋三のように断定的表現が目立つ保守系の首相がいる一方で、麻生太郎のように曖昧表現をよく使う保守系の首相も存在している。さらに、革新的と位置づけられる首相においても断定的表現と曖昧表現の使用比率に共通した傾向は見られていない。

また、「でございます」「と思います」といった定型表現は多くの首相で繰り返し用いられており、儀礼性や慎重さを担保しつつ議会運営を円滑化する役割を果たしている。一方で、この定型化は答弁を形式的・儀礼的なものとし、首相答弁の個性や政策メッセージの独自性を弱める要因ともなっている。以上のことから、首相答弁における言語表現使用の特徴を理解するためには、断定性と曖昧性の比率だけでなく、一人称表現の単数形・複数形の使い分けや、定型表現の機能を含めて多角的に検討する必要があると考えられる。

5 まとめ

本研究は、宇野宗佑（1989年）から石破茂（2025年）に至る歴代首相答弁を対象に、一人称表現および文末表現の断定性・曖昧性を数量的に分析した。その結果、一人称については単数形が全体として圧倒的に多く、特に菅直人や菅義偉では個人としての責任や意志を強調するスタイルが顕著であった。一方、麻生太郎や安倍晋三などでは他の首相に比べると複数形が比較的多く用いられ、政府や国民との連帯性を前面に押し出す傾向が見られた。

文末表現については断定表現と曖昧表現がいずれも全体の約2割前後を占め、両者が拮抗していた。当初の仮説であった「保守＝曖昧、革新＝断定」という単純な二分法は必ずしも当てはまらず、むしろ政権基盤や政策課題の性質といった外的要因がスタイルに影響を与えている可能性が示唆された。また、「でございます」「と思います」といった定型表現の多用は議会運営を円滑化する一方で、答弁を形式化し、個性や独自性を弱める要因として作用していた。

参考文献

- [1] John Wilkerson and Andreu Casas: "Large-Scale Computerized Text Analysis in Political Science: Opportunities and Challenges," *Annual Review of Political Science*, 20, pp. 529-544, 2017.
- [2] Daniel Diermeier, Jean-François Godbout, Bei Yu and Stefan Kaufmann: "Language and Ideology in Congress," *British Journal of Political Science*, 42(1), pp. 31-55, 2011.
- [3] Benjamin E. Lauderdale and Tom S. Clark: "Scaling Politically Meaningful Dimensions Using Texts and Votes," *American Journal of Political Science*, 58,(3), pp. 754-771, 2014.
- [4] Tae Yano, Noah A. Smith, and John D. Wilkerson: "Textual predictors of bill survival in congressional committees," *NAACL HLT '12 Proceedings of the 2012 Conference of the North American Chapter of the Association for Computational Linguistics: Human Language Technologies*, pp. 793-802, 2012.
- [5] 木村, 金丸, 村田, 掛谷: 新聞の社説を教師信号とする文章の右翼度・左翼度判定, 言語処理学会第14回年次大会, pp.289-292, 2008

- [6] 掛谷, 大南: 国会会議録に基づく短命議員・短命大臣の特徴分析, 知能と情報 (日本知能情報フレンジ学会誌) Vol.31, No.2, pp.617-625,2019
- [7] 畑中, 村田, 掛谷: 新聞社説・国会議事録に基づく言論のイデオロギー別分類, 言語処理学会第15回年次大会, pp.408-411,2009
- [8] 尾崎: 国会会議録を用いた政党類似度マップの構築, 筑波大学理工学群工学システム学類卒業論文, 2013
- [9] 尾崎, 掛谷: 国会会議録の主張文取り出しおよびその要約, 言語処理学会第20回年次大会, pp.504-507, 2014
- [10] 橋本悠, 掛谷英紀: “Web 上のレビュー記事のイデオロギー分析とその応用,” 言語処理学会第16回年次発表論文集, pp.740-743, 2010.
- [11] 東, 橋本, 掛谷: Web 上の言語資源に基づく国会議員の分類, 言語処理学会第17回年次大会, pp.476-479,2011
- [12] 東, 掛谷: 国会議員のツイッター分類とその応用, 言語処理学会第18回年次大会, pp.559-562,2012.
- [13] 河瀬, 吉原: 戦後の歴代首相の施政方針演説と所信表明演説の計量分析, 情報知識学会誌, 30(2), pp.200-205, 2020.
- [14] 国会会議録検索システム, <https://kokkai.ndl.go.jp/>
- [15] 国会会議録検索システム検索 API , <https://kokkai.ndl.go.jp/api.html>
- [16] MeCab: Yet Another Part-of-Speech and morphological Analyzer, <https://taku910.github.io/mecab/>